

平成13年4月18日

「環境と開発」シリーズの総合討論課題

堀尾哲一郎

キーワード：

・持続可能な開発

- 将来の世代が、欲求を自らの力で満たす能力を損なうことがなく、現代の世代の欲求をも満たすことができるような開発 -

《 In 1987, the World Commission on Environment and Development released its report entitled Our Common Future (known as the Brundtland Report). The Brundtland Report defined sustainable development as "development that meets the needs of the present without compromising the ability of future generations to meet their own needs. " 》

ミクロの資源効率の向上ではなく、社会全体での資源消費の絶対量である。

東京湾三番瀬にみる目先の快適さと子孫が育っていく未来の環境とのバランス。

・循環型社会の構築

トリプル・ボトム・ライン

政府や企業は従来型収支決算ばかりでなく、以下の3項目にも目を向けるべきである。

1. 経済的な豊かさ

2. 環境の質

3. 社会的公平性：経営理念の作成や価値監査の実施を含む倫理、従業員や地域社会との関係、人権、利害関係社の関与、さらに社会的責任投資（SRI）などの視点。

炭素循環（地球温暖化）、窒素循環（赤潮、土壌の酸性化）

ゼロエミッション

3R

法的側面

・循環6法の成立（平成12年4月）が日本の社会をどのように変えるか？

・循環関連6法

「循環型社会基本法」2000年6月施行

「廃棄物処理法」（改正）2000年10月施行（一部を除く）

- 「資源有効利用促進法」2001年4月から施行
- 「建設資材リサイクル法」2002年6月までに施行
- 「食品リサイクル法」2001年6月までに施行
- 「グリーン購入法」2001年4月までに施行
- ・ P R T R (環境汚染物質排出・移動登録)法(化学物質管理法)
- ・ 家電リサイクル法
- ・ 知的所有権 - 遺伝子特許(特定疾病など)
- ・ ロードプライシング - シンガポール、オスロ、ソウル、ロンドン(検討中)

国際的側面

- ・ I P C C 第3次評価報告書が示す温暖化緩和に対する「選択肢」
経済 - 環境、グローバル化 - 地域化
- ・ C O P 6 (The Conference of the Parties of the UN Framework Convention on Climate Change 6) (ハーグ)における米国と日本の立場
 1. 排出権取引
 2. クリーン開発メカニズム
 3. 共同実施
- ・ エクソン・モービルの意見広告 (13.04.18.)
- ・ 南北問題

経済的側面

- ・ 大量生産、大量消費、大量廃棄からの脱皮
- ・ 人間の経済性は地球の不経済性
- ・ 国民総生産(GNP)、購買力平価(PPP)、国民純生産(NNP)、自然が生み出す価値
- ・ GPI (Genuine Progress Indicator)、ISEW (Indexes of Sustainable Economic Welfare) : 家事や育児、ボランティア活動、あるいは家族崩壊や通勤、余暇時間の喪失、農地の減少のコストなども対象にしている。
- ・ 環境経済学入門(東洋経済新報社)

企業の対応

- ・ 環境経営と環境報告書
- ・ 自動車産業
省エネ(燃費の改善)、非炭素系燃料(水素、電気)、廃棄
- ・ 家電産業
省エネ(低消費電力)、リサイクル

- ・ 建築産業
建物の長寿命化、省エネ化、安全性
- ・ 化学工業
レスポンシブル・ケアとは？：化学物質を製造または取り扱う企業が、製品の開発から製造・使用・廃棄までの全サイクルにおいて、環境と安全の確保を公約し、対策を行う自主管理活動
ダイオキシン、P C Bなど。
- ・ エネルギー産業
電力、ガス、石油、石炭、原子力、自然エネルギー
- ・ I S O 14000（有効活用率？） - 事業活動に役立つシステムか？
2000年12月末の日本における認証件数 5222 件
- ・ 静脈ビジネス

安全性 - 証明が難しい

- ・ 遺伝子組み替え作物（G M O）
- ・ 環境ホルモン（外因性内分泌攪乱化学物質）

環境倫理

- ・ 利己主義と利他主義
- ・ 距離尺度と時間尺度
- ・ 現実自分中心に色彩が濃くなっている
- ・ 人間も生物の一つであり、他の生物との共生なくして生き続けられないこととの認識（D N A）
- ・ 約 2500 万年毎の過去 5 回の生物種絶滅の危機

以上